

子どもの居場所の機能の検討

Considering Some Functions of “Children’s Place”

田村 光子

近年、思春期を迎えた子どもたちの深刻な事件が注目される中、いまを生きる子どもたちの「居場所のなさ」を指摘する声がある。筆者は、子どもの居場所に注目し、「居場所づくり」のあゆみを踏まえながら、その背景にある子どもの姿を捉え、子どもの居場所は、いまを生きる子どもたちの主観的福祉のために大切な場や人間関係があることを確認した。さらに、千葉市における「こどもカフェ」の展開を通して、子どもの居場所の機能について検討した。大人と子どもの相互行為の過程をコミュニティの中に意図的に作り出すこと、子どもにとってのインフォーマルな公共空間の必要性を見出し、今後さらなる活動展開の中で検討が必要であることを示唆した。

キーワード：子ども、居場所、地域、公共空間、福祉

1. 問題の所在

近年、思春期を境目とした子どもの深刻な事件がクローズアップされる機会が多い。痛ましいかたちで子どもの命が奪われる中で、社会的に子どもへの見守り強化の必要性が叫ばれている。それに対して、筆者は、地域において子どもたちへの管理・監視の視点のみが強化されることを危惧している。

学齢期から思春期を迎える子どもの成長・発達には、試行錯誤できるような経験の場や、将来像を検討できるような、相談し、受け止めてくれる大人との関わりが重要である。しかしながら、現代の子どもたちは、少子化や成育環境の制限からこうした場や人間関係を得る機会は少なくなっている。さらに、現代の子どもを取り巻く貧困や格差等の社会的課題も相まって、いまを生きる子どもたちの「居場所のなさ」を指摘する声も挙がっている。

筆者は、2011年から千葉市において子どもの居場所「こどもカフェ」の展開に協力してきた。子どもの声から「信頼できる大人のいる子どものための居場所」の必要性を受けとめて活動するなかで、上記のような深刻な事件が起き、いまこそ子どもの成育環境について考え、大人に何ができるのかを検討す

る機会ではないかと考えた。そこで本稿では、「子どもの居場所」をめぐって、子どもたちを取り巻く社会的課題を捉えながら、千葉市での取り組み事例を踏まえ、子どもの居場所の役割・機能について検討していく。

2. 「子どもの居場所」をめぐって

—いまを生きる「子ども」の課題

(1) 「居場所づくり」のあゆみから

子どもの居場所についての研究は、さまざまな「居場所づくり」が実践され、その積み重ねから検討されてきた。その初期は、1980年代に増加する登校拒否や不登校によって誕生したフリースクールやフリースペースなどの取り組みから始まる。フリースクールやフリースペースというと、学校から離脱した子どもたちのための「社会からの逃避空間」のように捉えられがちだが、斎藤 (2015) によれば、「子どもたちのつまづき・立ちどまりも、与えられたものでない自分の人生を歩みだすきっかけとなりうる積極的な側面を持っている」。つまり、これらの取り組みには、社会からの逃避や離脱による「一時保護的な空間」を超えて、子どもが主体的に社会

に歩みだすための「子どもの権利の保障のための空間」としての役割が見出される¹⁾。

2000年以降広がる、「ミニ・さくら」などの「こどものまち」の取り組みには、子どもたちが主体的に「まち」を形成し、「働く」という体験を通して「社会」と試行錯誤しながら関わり合うという、「市民としての子ども」の姿が体现されている。中村(2013)は、『こどものまち』は職業体験プログラムではなく、遊びなのだ。遊びに他人の評価は必要ない。(中略)『働く』という活動が“目玉”の『こどものまち』も、(中略)『子どもたちが安心し、自己肯定感情が得られる場と関係』である」としている²⁾。

子どもの「遊び」の保障をめぐっては、1975年から取り組みが始まったプレーパーク・冒険遊び場の展開がある。天野(2013)は「日本の子ども関係の施策は、ほとんどが屋内中心に執られてきた。保育園、幼稚園、子育て支援施設、学童クラブ、児童館等々。しかし子どもの育ちは基本的に屋外で保証されることを忘れてはならない」としている³⁾。屋外だからこそ火、土、木などを扱う野性味あふれる経験ができる。また、プレーパーク・冒険遊び場の取り組みは、都市計画の視点から子どもの成育環境の欠如を指摘している点でも、都市、社会空間における子どもの「居場所づくり」の展開としての重要な役割を果たしている。

日本の子どもの「居場所づくり」の取り組みとして、戦後の児童福祉法(1945)、児童憲章(1950)の制定時から取り組まれてきた「児童館」⁴⁾のあゆみも重要である。八重樫(2012)によれば、児童館は1950年代から高度経済成長期において、一般児童の健全育成対策の必要性から国庫補助制度の創設により整備、拡充が進められ、子どもの居場所としての実践を積み重ねてきた。一方で、80年代後半からは、社会保障費抑制のあおりから補助金は抑制へと向かい、運営主体も公営から民営へ、2000年以降は指定管理制度の導入や一般財源化が進んでいる⁵⁾。西野(2013)は、児童館において「どこまで子どもの自由な『遊び』が保障されているのか。そこが子どもにとって本当に安心できる『居場所』となりえているのか、その質が問われている」とし、さらに、「子どもが家庭や学校でためているさまざまな

ストレスや悩みを聞いてくれる、受けとめてくれる環境が、そこにあるかどうかが問われている」と指摘する。また、児童館事業の背景には、1990年代からはじまる「子育て支援」や「放課後児童健全育成」事業がある。「子育ての社会的責任」が叫ばれるようになり、その展開を「児童館」が担うケースも多い中で、「子育て支援・健全育成の名のもとにおとなの都合が優先されていないかが問われなければならない」とも指摘している⁶⁾。子どもを取り巻く社会が大きく多様化する中で、あらためて子どもの福祉施策としての児童館の役割について再確認する必要が問われている。

以上、「居場所づくり」のさまざまな実践展開を概観すると、市民レベル、施策レベル、さまざまな実施形態はあるが、これまであたりまえにあった子どもの成育空間が減少し、経済社会の発展によって社会構造も大きく変容する中で、子どもの成長・発達をいかに保障するのか、多様な子どもの育ちにいかに対応していくのかという課題に向き合ってきたことがわかる。また、そこから浮かびあがってきた子どもたちの姿や、子どもを取り巻く社会的な課題にに応じて、さらに多様な子どもの居場所が誕生し、展開されることで、学校教育や福祉施策の枠組みでは見えてこなかった子どもの成長・発達についてのあらたな視点を見出していることも把握できる。

(2) 貧困・社会的排除の視点から

社会構造の大きな変化の中で、「社会に溶け込めない」「学校にも家庭にも居場所がない」子どもたちの姿が指摘されている⁷⁾。児童虐待の増加、学力格差の問題、子どもの貧困など、子どもを取り巻く社会的な問題が明らかにされてきたいま、子どもたち自身が零れ落ちてしまわないようにする意識や、制度的空間(学校やクラブ活動など)に適應できない状況からいかに対応するのかといった、子どもの「社会的排除⁸⁾」の認識にも注目しなければならない。テス・リッジ(2010)は、子ども社会的排除の側面に注目し、そこには、経済的保障や労働市場の問題を超えて、「限られた参加、社会的福利や自尊心、社会的アイデンティティ、社会的統合に対する異議申し立て、さらに、適切な社会関係と社会的ネットワークを維持・形成する能力の減退、こうし

たすべてのことが」⁹⁾ 関連するとしている。子どもにとっては「貧困」よりも「貧困」による社会参加や人間関係からの排除についてみていくことがあらためて重要だという視点を導いてくれる。

日本の子どもの貧困率は平成25年度の調査では16.3%、6人に1人が貧困状態に置かれており、国際的にみても高いレベルである。特に「ひとり親家庭」の貧困率が高いことが指摘され、日本のひとり親世帯の就労率が世界的に高いにもかかわらず、社会保障が十分に行き届いていないことも明らかとなっている。政府は2013年に「子どもの貧困対策の推進に関する法律（以下、子どもの貧困対策法）」を施行し、家庭の経済状態によって子どもの将来が左右されることのないような環境を整備することを目指しているが道半ばである。その中で、市民レベルで全国的に広がる「子ども食堂」の取り組みが注目されている。貧困状態にある子ども、子育て家庭のもつ实际的な困難の状況に地域でつながり、社会的に包摂していく市民レベルの取り組みである。栗林（2015）のエピソードからは、気になる子を見つめるさまざまな地域の取り組みと、「おせっかい」と、柔らかな関係の中でニーズにあった「居場所」に子どもたちをつないでいく展開が示されている。

「七年前、児童館での読み聞かせで小学校二年生のMちゃんに逢えました。Mちゃんは保育園に通っている当時から気になる子でした。Mちゃんの保育園送迎を、小学生のお兄ちゃんが担っていたからです。ずっと気になっていたMちゃんと私を、絵本が繋げてくれました。その後Mちゃんとは話のできる関係になり、三年前のある日、こども食堂に誘いました。食堂の帰り道には笑顔で『うちはテレビがなくて、学校で馬鹿にされるんだけど、子ども食堂の人は優しくったね！また行きたい』と話し、その後勉強会にも毎週来るようになりました。Mちゃんは二歳の時にママが他界、十一歳の時に、パパも闘病の末他界しています。Mちゃんとお兄ちゃんの困難は見えにくいから問題です¹⁰⁾」

貧困や格差に政策的に対抗することは重要なことであるが、実際にはその解消がなかなか進まないのが現状である。貧困対策を超えて、子どもを取り巻

く社会的排除の状況に市民レベルで子どもの社会的包摂のある地域をつくりあげていく取り組みには、子どもの居場所の新たな役割が見えてくる。

（3）子どもの「主観的福祉」の視点

ここまで、さまざまな子どもの居場所の展開とその背景にある社会問題を概観してきたが、その初期から現代に至るまでの「子どもの居場所」の実践において、貫いて大切にされてきたのは、そこにいる子ども自身が『そこに居ていい』と感じる思いであった。しかしながら、格差が広がり、社会構造が変容する中で、いまこそ「子ども」の存在・問題が置き去りにされている。あらためて子どもの居場所は、そこに集う子どもの思いを大切にする視点に立ち返ることが必要であろう。

「居場所」という言葉は単なる空間ではなく、「私にとっての居場所」、「あなたにとっての居場所」という表現ができるように、そこには、「場所」としての空間的意味に、そこに「居（る）」人にある一定の特定性をもたせる意味をもっている。さらに、「居場所がある」「居場所がない」という表現から考えてみれば、そこに「居（る）」人自身が、くつろぎや安心、心のよりどころとして認める、受容れるという意味も「居場所」には加わってくる。つまり「子どもの居場所」といったとき、そこには、「子ども」という特定性をもたせながら、子ども自身が「ありのままに居られる」「安心できる」「認めることができる」といった、子ども自身が主観的に感じる幸福感や福祉、つまり子どもの「主観的福祉」の視点がそこにあるかどうか、それが「子どもの居場所」においては鍵になる。

子どもの「主観的福祉」の視点は、UNICEFイノベーション研究所が毎年2007年に刊行した『先進国における子どもの幸せ—生活と福祉の総合的評価』報告書の中で示されている。本報告書では、子どもの「主観的福祉」を「健康」「学校生活」「個人の福祉」の面から捉えており、子どもの「主観的福祉」を測定する項目の一つとして、日本の子どもの「疎外感」の高さ¹¹⁾が指摘されたことが知られている。

「主観的福祉」への着目について、OECD報告書¹²⁾によると、OECD加盟国では用いる指標の如

何にかかわらず（「主観的福祉」の）レベルは高いが、指標によっては、中所得国や開発途上国より低い分析結果があることを示唆している¹³⁾。つまり、先進国の人々が主観的に感じている幸福感よりも、発展途上国の人々の幸福感のほうが高い場合もあるということだ。経済的豊かさは「主観的福祉」の下支えになるが、それが絶対条件ではないことがわかる。

日本の子どもたちは「疎外感」のみならず、「自己肯定感の低さ」も指摘されている¹⁴⁾。また近年の調査では、「忙しい」「もっとゆっくり過ごしたい」と感じている子どもたちが多いことも指摘される¹⁵⁾。一方で、発展途上国の子どもたちほど、「困難を超える力」や、「自分で自分を守る力」を得る体験を積み重ねていることを示唆する声もある¹⁶⁾。

子どもの「主観的福祉」に注目することは、経済的豊かさを越えたところで捉えられる、「子ども」自身の幸せについての「子ども」自身の認識に焦点をあてることである。特に、学齢期から思春期にかけての「子ども」から「大人」への移行期という特別な時間において、「子ども」が自らの存在や生活において「幸せ」や「福祉」について認識していくその過程に、子どもの居場所の役割があると考えている。さらに、子どもの居場所において、子どもの「主観的福祉」に注目することは、子どもの「思い」から、いまを生きる子どもたちだからこその力や可能性を見出すこともできる。それは、子どもの社会的包摂という機能に加えて、あらたな「子ども」へのまなざしについて検討する機会を提示している。そこに、子どもの居場所の機能と課題があるのではないかと筆者は考えている。

3. 千葉市・子どもの居場所の展開

—「こどもカフェ」の取り組みを通して

(1) 子どもたちの「居場所」への思い

千葉市における「こどもカフェ」は、「信頼できる大人のいる子どもの居場所がほしい」という子どもの声を受けて展開された。そのきっかけは、「子どもの声を施策に取り入れる」という千葉市における「こども参画」の取り組みにあった。

千葉市では、「次世代育成支援対策法」¹⁷⁾（2003）の施行により、2005年に「千葉市次世代育成支援行動計画・夢はぐくむちばこどもプラン（以下「こ

どもプラン」とする。）」を策定している。2009年、「こどもプラン」が「策定から5年を経過したことから、前期計画の評価等を踏まえ、新たな課題に対応するために、平成22年度から5年間の次世代育成支援行動計画（後期計画）（以下、改訂こどもプランとする）を策定する¹⁸⁾」にあたって、「こども参画¹⁹⁾」の視点を盛り込むこととなった。具体的には、子どもの意見を反映するために、子どもの意見を聞くワークショップを実施し、子どもたちの生の声のできる限り計画に反映できるようにした。さらに、その成果を「こどもの力による次世代育成支援計画への提言²⁰⁾」としてまとめ、フォーラムを開催し直接市長に提出するとともに、子どもを取り巻くさまざまな課題について、直接市長と語り合う場を設けることとなった。

ワークショップにおける子どもの意見²¹⁾では「遊び場所や知らない人と知り合える場所がない」「細い道でも車がスピードを出していて危険」「図書館の利用時間が短く、体育祭等の振り替え休日の月曜日閉館は不要」など、子どもの立場から身近な地域において空間的制約をうけている実情を訴えていた。また「『千葉市のプレーパーク』を知らなかった」など、子どもが興味をもつ空間についての情報が、子どもたちに伝わっていないことも把握できた。さらに、「信頼できる大人がいる身近な相談場所がほしい」「レンタルお父さん（キャッチボールとか）やレンタルお母さん（料理など）制度って必要な人には良いかも」「『家出の家』（家出の行き先）があって、話せる大人が居れば親も心配しない」「ひとり親支援や同じ境遇の子同士で話し合える場が必要」など、子どもの声や思いを交換できる場の必要性、また、その声を受けとめてくれる大人がいる場を求めている。一方で、「政治が信用できない。正しい大人って何？」「児童相談所とか、名称からaway感があって利用する気にならない」など、子どもが求めている「大人」や支援には、専門家や専門機関という信頼を超えて、あらためて大人の見方や考え方に対する視点の転換を要求していた。

筆者は、ワークショップにおいて、子どもたちと共に考え活動する「大人」として、時にはファシリテーターとしての役割を果たす中で、子どもたちの声や思いを聴くことは、まず、大人が抱えている価

価値観をしっかりと子どもに伝えることから始まることを知った。前述の「正しい大人って何?」という子どもの意見は、千葉市の担当課が「なぜ子どもたちに「こどもプラン」について考えてもらうのか」と説明する中で生まれた。「こうした取り組みを通して、みんなが正しい大人になるように……」といった表現が「大人」から発せられたことに、「子ども」の疑問・思いが投げかけられたのである。それは、「子ども」と「大人」の価値観が交錯する経験であり、また「子ども」と「大人」のパートナーシップが築かれていくきっかけを与えることになった。

さらに、子どもの声を聴く過程において、大人や社会に対して持っている思いや感情が、ネガティブなものであったとしても、その子どもの声に応答していく大切さも実感した。「家出の家」という表現は、友人の家出の話から生まれた。子どもたちの中にも小さな家出をした体験があることが共有され、「逃げ出したい」でも「身近にその思いを受けとめてほしい」という思いの共感がはかられた。大人や社会からは、子どもが発する「家出」という言葉は不条理な問題行動に捉えられるかもしれない。しかし、「こうした話をしてもいいんだ」という子どもの安心感、信頼感の下に語る子どもの「家出」には、子ども自身で問題解決を図るための試行錯誤の思い、子どもが社会に関わろうとする姿が捉えられた。「子ども」の声を批判する前に、受け止めながら、「大人」の見方や考え方を転換していくこと、子どもの声を聴く大人の役割は、子どもの声を聴く過程を通して「子ども」と「大人」のパートナーシップをいかに築いていくのか模索することにある。

こうした子どもの声をうけて「改訂こどもプラン」では、「プランNo.28 子どもの居場所のありかた」として、「子どもの居場所について、あり方を検討し、子どもの身近な場所に、既存施設等を活用して設置すること」、さらに「プランNo.29 こどもカフェ（仮称）の設置」として、「子どもが信頼できる大人がいるこどもカフェを、子どもの身近な場所に、既存施設等を活用して設置すること」が記載された。

(2) 子どもの居場所の実際

上記のプランを受けて、「こどもカフェ」を展開するための実際的な遊び場の展開²²⁾が始まり、その結果を受けて、2011年10月より「こどもカフェ」のモデル事業が展開されることになった。さらに、他地域にて2012年10月より展開され、現在2か所が設置され、モデル運営されている。

そこで、これまで検討してきた内容を踏まえて、「こどもカフェ」の実際的な様子から、「子どもの居場所」の機能についてさらに検討・考察を深めたい。以下に3つの事例を提示する。[事例1]は、「遊び」の重要性とそこで繰り広げられる人間関係に注目した。[事例2]は、インフォーマルな公共空間だからこそ「自由」とその課題、[事例3]では、子どもの思いを受けとめる居場所の役割に注目し、考察を加えた。

事例は2011年8～9月においては、千葉市・大学等共同研究事業における「こどもに信頼される大人とこどもの居場所のあり方報告書」より、2011年10月～2014年9月においては、日々の実施報告書および、各年度の事業報告書を参照とした。

[事例1] 子どもの潜在的な力を引き出す「遊び」

こどもカフェでは、2012年4月から、あらたな「遊び」として、ダンボール・ハウスを取り入れた。こどもカフェでは、机や椅子などダンボールでできている。子どもたちにとって、自由に描くことができるなじみの素材となっていた。また、さまざまな素材を使用して秘密基地をつくる姿や、大棚の中のものを出して、棚の中に身を潜めて過ごす子どもの姿が見られていた。子どもたちが本能的に、こどもカフェの中で自分の居場所を作り出そうとしていた。

2012年5月の初旬のこどもカフェに、大きなダンボール・ハウスが登場した。既製の部品で組立てるダンボール・ハウスであったが、小学生ならば十分入ることができ、大人も身がかがめれば入ることのできる大きさである。ダンボール・ハウスのキットを広げ、組立ての要領を伝え、新しい遊び道具を手に入れ、夢中になって、子どもたちで組立てはじめた。ダンボール・ハウスが完成すると、中に入ったり、壁面に落書きをしている。数名の女子た

ちが徒党を組んで、「ここは自分たちの家。入会証を持っていないと入れない」と紙に書いて、ダンボール・ハウスの出入口に貼り出した。後からやってきた男子たちが入ろうとすると、「男子も禁止！」と言われてしまい、「自分たちも家をつくりたい」という声があがり、そこにあったダンボールを組み合わせて、自分たちのダンボール・ハウスを作り出していた。その日はダンボール・ハウスを作ることに熱中しており、なかなか帰ろうとしない状況があった。

「もっとダンボールがほしい」という子どもたちの声をうけて、翌週には、90センチ四方のダンボールシートを50枚ほど準備した。すると、こどもカフェの空間いっぱいに、またそこからはみ出しながら、ダンボール・ハウスを作り出す姿が見られた。扉をつけたり、折り紙を貼り付けたり、らくがきをしながら、オリジナルの「家」を作っていく。子どもたちは「家」が完成すると、その中でくつろいだり、友だちを招き入れたりして過ごしている。自分の作った「家」に愛着が湧いている様子で、終了時刻になってもなかなか帰らない。子どもたちからは「こどもカフェに泊まりたい」という声も挙がった。

ダンボールシートによる「家」づくりは、男女や年齢の区別なく、自律的に、また創造的に展開できる遊びとなった。こどもカフェに来所すると、荷物棚ではなく、自分の「家」を設置してその中に荷物を置いて外遊びに行き、疲れると「家」の中に入り込んで過ごす子どもの姿も見られた。こどもカフェのなかの「自分の居場所」に安心している様子であった。

一方、「家」づくりは、閉鎖的な面も現した。「○ ○と△△の家。その他は入室禁止」など、選別的に入室できる友だちを限定する様子がみられ、こどもカフェは広い施設空間とはいえないため、来所した時間によって、空間や素材の制限により取り組みない子もいた。子どもたちが空間に安心感をもつことは大切に感じながら、「友だちを選別することで、いい生活ができるの？」と「大人」から問いかけたが、はじめは、「大人」の問いかけにも、納得していない様子が見られた。そこで、翌週になってから、ダンボールを利用して「店」づくりの遊びを提案して、仮想の「通貨」を準備して手渡すと、徐々

に、子どもたちは何をするのかを理解して、自分の「家」を「店」に変えていく姿が見られた。いつも、こどもカフェでも携帯ゲームに夢中になっている男子グループは“ゲームやさん”と称して自分たちの「家」を「店」にかえて提供していた。自らの携帯ゲームを貸出し、クリアできると通貨を返金するしくみで、簡単なゲームならば返金されるため、その「店」はまったく儲からない。しかしそこでは、ゲームの苦手な子どもも、仲間に入ることができなかった子どもたちも受け入れる姿が見られた。ゲームを教えあう関係の中で、異年齢の子どもたちのかかわりが見られるようになっていく。子どもたちは、価格を高くつりあげて設定するのではなく、より多くの人に「店」に来てほしいという思いのほうが強かった。子どもたちは、“価格”ではなく、多くの人と“交換”することを楽しむ。より多くの人と“交換”することで、「遊び」の楽しさが増すことを本能的に認識している。そしてこうした「遊び」の展開は、男子と女子、異年齢、さらに、こどもカフェに来所していた外国籍の子どもとの関係性においても、固定化された関係性を開く作用を与えていた。また、ダンボールという素材は、その後も子どもの遊びを展開していく材料として、こどもカフェでその後も利用され続けた。

【事例2】 インフォーマルな公共空間の必要性和その課題

こどもカフェでは、開所時より、子どもの居場所として子ども自身が環境をデザインしていくことを目的として、子どもたちは、ダンボールの椅子や机にデザインをしてきた。さらに遊びを広げるために、窓に描くことができるクレパスを準備した。子どもたちは、クレパスで窓に描くことを楽しみ、棚の上に上がって、窓の高いところまで落書きをしていた。「自由だよ！こどもカフェ最高！」という窓の落書きがあった。日頃、子どもを取り巻く成育環境には制限が多い中で、子どもの感じる「自由」を提供することも「子どもの居場所」の役割であった。

一方で、こうした「自由」によって、子どもを狭間に立たせてしまうことも起きた。こどもカフェの外遊び空間では、チョークで地面に落書き遊びを楽

しむ姿が見られた。ろう石遊びの要領で、ドッチボールのコートを描き、試合を楽しむ、絵を描いて友だちと見せ合うなどの様子も見られていた。

ある日、子どもから「子どもルーム（千葉市における放課後健全育成事業、以下、「子どもルーム」とする。）の時に、チョークで落書きしないように言われたよ。らくがきってしてもいいの？」という訴えがあった。こどもカフェの外遊び空間は、平日は子どもルームの遊び場となっている。子どもルームでは、保護者から「どうしてカフェはよいのに、ルームではだめなのか」という問い合わせが入り、活動内容の違いについて、保護者あてに説明をしなければならない事態となったと千葉市を通して話があった。それからは、千葉市の担当課の調整もあり、子どもルームの活動に響かないように、描いたものを水で消すことにした。こどもカフェの終わりの時間が近づくと、落書きの上に水撒きをしながら消すという作業が加わったが、大人の作業を見ながら、子どもたちも一緒に落書きに水撒きをしながら消していく。子どもたちにとっては、水撒きもカフェでの遊びの一つとなっていく。

日々、子どもたちは、フォーマルな大人と子どもの関係（家庭や学校、子育てサービスなど）の中で、与えられたルールや枠組みのある生活に見守られ、育っている。子どもの居場所は、こうした子どもたちの生活に、インフォーマルな関係性を提供していくことでもある。しかしながら、その後もこのインフォーマルな空間の「自由」が課題となる事態は度々発生した。平日開催日に、放課後10名程の子どもたちが来所して「ケイドロ」（鬼ごっこ）を始めたが、自由に走り回るこどもカフェの子どもたちが、子どもルームの幼い子どもたちにぶつかったときにどちらが対応するのか、という協議がもたれることになった。

子どもたちが安全に過ごすことを保障しなくてはならない健全育成の役割と、出入り自由の生活空間が共存することは難しいのも事実である。こどもカフェと子どもルームの所管課は異なるため、千葉市のそれぞれの所管課の担当者がまず話し合うことになった。その結果、子どもルームの外遊び時間には、こどもカフェの子どもたちは、部屋の中で遊ぶという折り合いがつけられた。

初めは、子どもたちをこうした「狭間」に立たせてしまったことを反省した。しかし、子ども自身が多様な社会の中で、「自由」と「ルール」の中で、いま自分の立ち位置や関わり方を図り、最善の行動を選択していく経験を積み重ねることに、社会にあるべき本来の「自由」の意味がある。実際、子どもたちは、放課後のさまざまなサービスを利用して過ごしており、自分自身の思いと関係調整をはかりながら、選択して生活していく力を持っている。子どもの居場所づくりの過程は、新たな関係性を作り出していく葛藤を、「大人」も「子ども」と共に経験する場となっている。

【事例3】 子どもの声から「生きづらさ」を受けとめる

こどもカフェある地域では、「総合型地域スポーツクラブ」が盛んで、野球やサッカー、柔道などの多くのスポーツクラブが存在している。「こどもカフェ」が開所する日曜日は活動が集中するため、休日でも地域の小、中学校のグラウンドで過ごす子どもが多い。その一方で、教育的な活動に馴染めない子どもの姿もある。

常連の子どもの中にも、運動神経が良いにもかかわらず、スポーツクラブに参加していない子どもがいた。「サッカーはおもしろくないからやめた」と言う。子どもたちの余暇生活は、習い事や部活、スポーツクラブと、とても忙しい。学校・家庭以外の時間も、往々にして組織的に組み込まれている場合が多い。確かに、このようにして、地域の子どもの安全や健全育成が図れることは重要だが、様々な理由から組織化された空間からはじき出される子どもの姿もあるのが実際である。

こどもカフェに訪れる子どもの姿には、「今日は誰もいないの……一人だから来た」と言って、大人との対話を求める姿も見られている。多くの人数が参加している時は活動的で、そこで展開される創造的な「遊び」は魅力的だが、一方で対話を必要とする子どもにとっては馴染めない空間となる。部屋の隅のダンボール・ハウスの中で、一人で寝っ転がって休んだり、子ども同士で対話する姿、携帯ゲームを一人で楽しむ子どもの姿は、不健全なのであろうか。「一人で居る」ことを支えることも、子どもの

居場所の重要な役割である。

こどもカフェが来所してから、ほぼ毎回来所する子どもがいた。開所日は、毎回、ゲームやおもちゃ、本などをかかえて来所するが、ゲームは他の子どもたちに貸してしまっていることが多く、こどもカフェでは、ゲームよりもスタッフや他の子どもたちとのコミュニケーションやスキンシップを楽しみにしている様子であった。友だちとの関わりにおいてもからかわれたり、置いてきぼりになる場面も目にしていたが、友だちとのかかわりの中で泣いたり、けんかをしてもし出入り自由のため、一度帰宅して、しばらくして気持ちが収まると再び来所する様子を見守ることもあった。ある時期から、情緒不安定な様子が見られるようになり、独り言を言いながら感情の処理ができなかったり、スタッフに手や足が出ることもあった。時には進んで友だちの中に入っていく様子もみられたが、しばらくは、スタッフを蹴ったり、奇声をあげたりと落ち着かない状況が続いた。そんな中、周囲にいる大人（スタッフやボランティア）に思いを吐露することがあった。「学校で指示をされるのがストレスになっている」「引越すかもしれない」「自分に兄弟ができる」など、その子にとってのつらい思いや、家族の状況変化を受けとめ難い思いが理解できた。子どもが複雑な思いを吐露できる大人の存在と居場所は、子どもの社会関係の複雑さを和らげ、包み込む役割がある。

思春期の中学生もこどもカフェの常連であった。二人の女子中学生は、六年生の頃から継続して来所している。「ここは幼い子ばかり」と、はじめは抵抗がある様子であったが、ドッジボールなどに入りながら徐々に幼い子どもたちと触れ合うようになり、二人も幼い子以上にはしゃいで遊ぶ様子が見られていた。来所して中学生になり、少しずつ学校で困っていることをスタッフに話すようになった。最初の相談は、「二人でテニス部に所属したが、Bさんが行きたがらないため、Aさんが困っている」とのことであったが、スタッフがよくよく話を聴いていると「部活をやめたい」「本当は美術部がよかったが、文化系の部活がない」という思いを話してくれた。「学校での呼び出しを避けている」と吐露したので、スタッフから「部活をやめたい」と自分の言葉で意思を伝えるように促した。

ある日、来所したAさんは、「2日程前にお母さんと喧嘩した」「2時間も言い合いをしていた」と漏らした。学校帰りに直接こどもカフェにやってきて「お母さんがうるさいから嫌だ」となかなか帰らない。思春期のAさんの思いに、ひと呼吸必要な時間を与えてくれる人と場所となっていた。

ある日、スタッフとの会話の中で「昨日、Bさんと一緒に学校脱け出したんだ」と満足そうに話をしてきた。スタッフがびっくりして理由を聞くと、「他に脱け出している人がいたから、真似してみようってBさんが……」と言っていた。「親が呼び出されたけど、怒られなかったよ」と反省している様子はない。「昼休みから放課後まで逃げていたのに、見つからなかったんだよ」と嬉しそうに話している。「お母さんとか先生、心配したと思うよ」と伝えると「ふーん」と少し思いにふけていた。一方で、進路についての相談する姿も見られた。平日は、塾に行く前に立ち寄って、勉強するわけでもなく、なにかしらの遊具で遊びながら、塾で寝ていることや、勉強したくないと言いながらも、スタッフと進学したい高校について話をしている様子がみられた。

子どもと関わる中で、こうした子どもの声から「生きづらさ」を受けとめる場面も多い。その背景に、近年指摘される、子どもの貧困、疎外感、自己肯定感の低さなどが見え隠れすることもある。子どもの居場所はすべての解決を図る機能はないが、子ども自身が思いを吐露し、受け止めてくれる大人との関係性の中で安心感を得て、立ち止まりながらもたくましく育っていく過程がそこにはある。

（3）子どもの居場所の機能の検討

① 子どもが「信頼できる大人」の配置

先にも述べたが、「子どもの居場所」には、「子ども」の主観に即した「居心地のよさ」があることが条件となる。その基本には、「子ども」として「そこに居ていい」という安心感・信頼感が大切になる。しかしながら、その安心感・信頼感は、「大人」や「親」の視点からの「危険がない」「安全」といった保護的な視点を越えたところにある。子どもらしくありのままにいられること、さらに、子ども扱いでなく一人の人間として受け容れてくれると

いった、「子ども」として守られる〈受動的権利〉と、潜在的な力を信じてくれる〈能動的権利〉の両者が大切にされること、それが「子どもの最善の利益」につながる。そのためには、子どもにとって安定的な他者、「信頼できる大人」との出会いや対話も重要である。

「居場所がない」と感じている子どもにとって、こうした「大人」と出会いの中で「基本的信頼感²³⁾」を育むことは重要な育ちの機会である。他方、少子社会の中で、どの子ども自らを「社会化」する機会が減少している。田中(2015)は「居場所とは、近未来への時間展望がもてる場所」とし、その空間で出会った「年長の人の存在」により「数年先が見通せることは若者に大きな安心感を与え」としている²⁴⁾。こどもカフェの展開でも、若いスタッフに思春期の子どもが思いを吐露する場面が多い。大人と子どもの相互行為の過程をコミュニティの中に意図的に作り出すことは、「子ども」から「大人」への移行過程で、社会に対する「信頼」を形成するためにも重要なのである。

千葉市では「信頼できる大人」という独特の表現をしている。それは子どもたちの表現から生まれた一つの解釈でもあるが、そこには、「誰が信頼でき、信頼できないか」という要素が求められているのではなく、子どもの声を聴き、受けとめながら、現代の子どもたちが多様な社会変容に晒されている実情を理解し、子どもの成長・発達を見守っていく視点を持っている大人の存在が求められているのではないかと考えている。今後、さらなる子どもの居場所の展開を通して、多様な視点から、「信頼できる大人」について検討を深めていくことが必要である。

② 「選択できる自由」をいかに確保するのか

子どもにとっての「誰でもよい」「出入り自由」「選択できる」といった、子どもの「選択できる自由」があることも、近年の「居場所づくり」の展開においては、大切な視点となる。

ギル・ヴァレンティン(2009)²⁵⁾は、「子どもを問題ある存在—子どもたち自身のためにも、他人の安全のためにも封じ込めておくことが必要な問題—として強調する子ども観からの展開」を主張する。また、子ども・若者における「公共圏」の無整備を

指摘し、「子ども・若者が大人のパノプティコン的なまなざしや管理から自由になり、遊ぶことができるプライバシーを持ちながらも、大人による導きや保護の枠内にとどまることができるような、安全で開かれた公共空間を地域コミュニティの中につくる必要がある」だと指摘している。

現代の子どもたちは、学校外の生活においても、制度的な・フォーマルな空間で過ごしていることが多い。社会構造の変化の中で、学力競争に晒されて逃げ場を求める子ども、集団になじみにくい子ども、社会的排除にある子どもなど、子ども一人ひとりの成長・発達の中で育まれるべき心情が、大人や社会の要求によって急かされたり、圧力をうけたり、放っておかれたり、蔑ろにされるケースも多くある。そのような中で、子どもが身体や心を自由にアクセスできるような、子どものためのインフォーマルな公共空間を整備することは、子どもを放任することではなく、むしろ子どもを社会的包摂の中で成長・発達できるようにしていくことに繋がる。

そもそも、子どもは主体的に成長・発達する力を持っている存在である。一方で、子どものための社会的空間の欠如が指摘され、子ども自身が「潜在能力〈ケイパビリティ〉」を高めていくための条件整備がなされていないことが問題である。アマルティア・セン(2006)は、「潜在能力〈ケイパビリティ〉」を高めるためには、「選択できる自由」が必要であり、「生活を価値あるものにする機会」が保障されることが必要だとする。子どもが「生活を価値あるものにする機会」を得ることが困難な時は、そこに大人や他者が介在して、「選択できる自由」を高めるよう支援することが求められる。逆に捉えれば、大人や他者が介在する中で、それが子ども自身にとって「価値のない」ものであれば拒否できる関係も備えなければならない²⁶⁾。こうした関係の中で、子どもの声を聞き、対話し、子ども自身が「選択の質」を高めていくことが、「自由」を保障し、子ども自身のもつ「潜在能力」を高めることにつながっていく。

このように、インフォーマルな公共空間の設定は、こうした子どもの成長・発達に積極的な意味をもつ。一方で、施策として展開するにあたっては、

こうした「自由」をいかに確保するのか、ヴァレン
タインが指摘するような「安全で開かれた公共空
間」を作り出していくには、大きな課題もあること
を事例では提示した。新たな関係性を作り出して
いく葛藤を、「子ども」と共に「大人」が引き受けて
いくこと、つまり、そこにも「大人」側の姿勢が問
われていると筆者は考えている。

③ あらたな活動の展開から学ぶ

子どもの居場所において、多種多様な活動が展開
されることは、子ども一人ひとりの多様なニーズに
応ずるために大切な点である。子どもだからこそ、
「遊び」をテーマに展開する活動も多いが、「居場所
づくり」の展開には、それぞれの特有の子どもの体
験・経験があることも把握された。

「こども食堂」のように、「食べる」を支える活動
は、貧困のみならず、あたたかな感情や生活への意
欲を生み出す大切な経験でもある。多様なアレル
ギーへの対応や衛生基準の厳格化もあり、子どもが
多様な「食」の経験を得る活動には制限も加わる。
家庭における「孤食」や「個食」が進み、「食」か
ら孤立や貧困等の社会的課題を把握しやすい中で、
市民レベルで「子どもの食」を支える活動の展開
は、非常に重要な位置づけにあると筆者は捉えている。

さらに、震災によって奪われた「居場所」を取り
戻そうとする大人と子どものあゆみにも注目した
い。大宮（2014）は、「福島のおとなたちは、放射
能による健康被害から子どもを守ることが待ったな
しの課題として突きつけられ」ているが、「同時に、
きのうまであった子どもらしい子ども時代を取りも
どすことというもう1つの課題を避けて通ることは
できない」としている。

福島・渡利の「さくら保育園」の実践記録では、
園独自の「食品放射能測定器（ホールボディカウ
ンター）」を導入し、「ザリガニやカブトムシ、キン
モクセイ、花びら、どんぐり、まつぼっくりなど
子どもたちが手にしたいものを測」る、「ザリガニ
は水洗いしたら線量が落ちて飼える」ようになる、
「拾ってきたドングリのなかには線量が高いのが混
じっているから支援のドングリを使」う、というか
たちで、「あたりまえの子ども時代に少しでも近づ

けるためにできることは何かと、次々に知恵と創意
が生まれてきて、遊びの可能性が広がっていき姿
が示されている²⁷⁾。

制限や規制があっても、子どもと大人、そして地
域の人々が「遊び」を取り戻そう、「育ち」を取り
戻そうとする取り組みがそこにある。そして、その
地に一からあらたな子どもの遊びや環境、文化を取り
戻そうとする真摯な姿勢が見えてくる。

人口減少社会の中で、身近な地域において子ども
たちの主観的福祉をいかに高めるのかは、将来のそ
の地域を紡ぐためにも重要な要素である。筆者は、
こうしたあらたな活動展開からも、学ぶべき示唆が
あると考えている。

4. おわりに

千葉市では、新たな「こどもプラン」（2015～
2019）が提示される中で、「子どもの居場所の全市
展開を図るため、地域のコミュニティの場である公
民館等を活用する」という新たな視点が示されてい
る²⁸⁾。

子どもの居場所のさらなる展開には、子どもの声
を聴く大人として、子どもと実際に関わるスタッフ
としての「大人」だけでなく、子どもの声を受けと
め、施策に反映していこうとする行政担当者の姿勢
も重要であったと考えている。また、現在の「こど
もカフェ」の展開では、2箇所のモデル事業だから
こそ可能になったことも多い。子どもの居場所とし
て大切なインフォーマルな特性をいかに保持してい
くのか、施策として展開していくからこそ難しい視
点でもあるが、今後のさらなるモデル事業の展開
の中で、子どもの居場所の機能の検討を深め、追求
していかなければならない課題である。

謝 辞

最後に、本研究にご協力頂きました皆様に心より
感謝致します。また本稿をまとめるにあたり、千葉
市こども未来部こども未来局こども企画課のご協力
にあらためて感謝申し上げます。

文献

- 1) 斎藤史夫（2007）「子どもの『居場所づくり』の可能
性と課題」, 早稲田大学大学院文学研究科紀要, 第1

- 分冊, 哲学東洋哲学心理学社会学教育学第1分冊52, p.127.
- 2) 中村桃子 (2013)「居場所としての『こどものまち』, 『子どもの権利研究 (第22号) 子どもの居場所ハンドブック』, 子どもの権利総合研究所, 日本評論社, p.21.
 - 3) 天野秀昭 (2013)「プレーパーク (冒険遊び場) のこれまでとこれから」, 『子どもの権利研究 (第22号) 子どもの居場所ハンドブック』, 子どもの権利総合研究所, 日本評論社, p.15.
 - 4) 「児童館」とは, 「児童に対して健全な遊びを与え, 健康の増進と情操の陶冶に資するという健全育成を目的とする屋内の児童厚生施設」である. 八重樫牧子 (2012)『児童館の子育ち子育て支援—児童館施策の動向と実践評価—』, p.64.
 - 5) 同上, pp.64-86.
 - 6) 西野博之 (2013)「児童館文化の質を問う」, 『子どもの権利研究 (第22号) 子どもの居場所ハンドブック』, 子どもの権利総合研究所, 日本評論社, pp.10-13.
 - 7) 浅川 (2015) は, 川崎市における中学一年生殺害事件の背景には, 「被害者も加害者も社会に受け入れられない“弱い立場”の少年たち」の姿があり, 「学校にも家庭にも居場所がない弱い立場の少年たちが繁華街で知り合い, 携帯のラインでつながり, 街中でグループを形成している中で事件が起こった」と指摘している. 浅川道雄 (2015)「ほんとうの心を育てる教育が求められる—中学一年生殺害事件の問題を掘り下げて—」, 『子どものしあわせ (771号)』, p.15.
 - 8) 欧州委員会 (1992) は, 「社会的排除」について以下のように説明している. 「社会的排除は, 過程と結果としての状態との双方を指すダイナミックな概念である. [中略] 社会的排除はまた, もっぱら所得を指すものとしてあまりにしばしば理解されている貧困の概念よりも明確に, 社会的な統合とアイデンティティの構成要素となる実践と権利から個人や集団が排除されていくメカニズム, あるいは社会的な交流への参加から個人や集団が排除されていくメカニズムの有する多次元的な性格を浮き彫りにする. それは, 労働生活への参加という次元をすら超える場合がある. すなわちそれは, 居住, 教育, 保健, ひいては社会的サービスへのアクセスといった領域においても感じられ, 現れるのである」, 内閣官房社会的包摂推進室/内閣府政策統括官 (経済社会システム担当) 社会的排除リスク調査チーム (2012)『社会的排除にいたるプロセス—若年ケーススタディからみる排除の過程—』, p.2. <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002kvtw-att/2r9852000002kw5m.pdf>. (2015.1.19参照).
 - 9) テス・リッジ著, 中村好孝・松田洋介訳, 渡辺雅男監訳 (2010)『子どもの貧困と社会的排除』, 桜井書店, pp.275-278.
 - 10) 栗林知恵子 (2015)「絵本が繋ぐ, 子どもと地域」, 「特集子どもの居場所 part 2 貧困や格差に取り組む活動のいま」, 『子どもと読書 (414)』, 親子読書地域文庫全国連絡会, p.14.
 - 11) UNICEF (2007), Innocenti Report Card 7, *An overview of child well-being in rich countries*, “Figure 6.3b Percentage of 15 year-olds agreeing with specific negative statements about personal well-being”, pp.37-38.
 - 12) OECD 編著, 徳永優子・来田誠一郎・西村美由起・矢倉美登里訳 (2012)『OECD幸福度白書—より良い暮らし指標: 生活向上と社会進歩の国際比較』, 明石書店, pp.312-313.
 - 13) 同上, p.312.
 - 14) 総務省青少年対策本部 (2004)『第7回世界青年意識調査報告書』, pp.66-67, 内閣府共生社会政策, <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth7/html/hyoushi.html>. および (財) 日本青少年研究所 (2008)『中学生・高校生の生活と意識調査』, 「調査概要」pp.6-7および「単純集計結果」pp.6-9参照, <http://www1.odn.ne.jp/~aaa25710/research/> (2014.2.27参照).
 - 15) 明石要一他 (2014)『速報版「第2回放課後の生活時間調査」子どもたちの時間の使い方 [意識と実態] 調査』, ベネッセ教育総合研究所, p.21参照, および「調査結果ダイジェスト意識と実態『ゆとりがない子どもたちの放課後』」, <http://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=4278> (2016.1.19参照).
 - 16) 松居友 (2015)「居場所, それは友情と愛」, 「特集子どもの居場所 part 2 貧困や格差に取り組む活動のいま」, 『子どもと読書 (414)』, 親子読書地域文庫全国連絡会, p.11参照.
 - 17) 「次世代育成支援対策法」(2003) は, 「次世代を育成する」, つまり「現に生活している子どもたちが健やかに育ち, その親を援助することを主目的とした法律」である. また, 「少子化の進行をふまえ, 子どもが健康に生まれ育つ環境整備を定めるとともに, 国による行動計画策定指針や地方自治体, 事業者による行動計画の策定など次世代育成支援対策を推進するために必要な措置を講ずることが目的」とされている. 本法をうけて, 2005年～2014年における「行動計画」を策定することが, すべての大企業とともに, すべての自治体に義務づけられている. 浅井春夫 (2004)『「次世代育成支援」で変わる, 変える子どもの未来』, 山吹書店, pp.27-28参照.
 - 18) 「千葉市次世代育成支援行動計画・後期計画」(2010), I 総論, pp.2-3参照. <http://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/kikaku/kodomoplanhenkou.html>. (2016.1.19参照)
 - 19) 「本計画では, 施策の対象等に応じて呼称を使い分けることとし, 乳児から青少年までの全般を指す場合は, 「こども」の呼称を用いるものとし, 児童福祉法で「児童」と規定する18歳未満のうち一定の範囲の者を指す場合は「子ども」の呼称を用いるものとする」と記されている. 同上, p.4. 参照.
 - 20) 同上, pp.124-126参照.
 - 21) 同上, pp.127-128参照.
 - 22) 「千葉市・大学等共同研究事業・こどもに信頼される大人とこどもの居場所のあり方」(主任研究者: 放送大学教養学部仙田満教授, 筆者は共同研究者)において, ワークショップが実施された.
 - 23) エリクソン (1959) の示した「基本的信頼」とは“生後1カ年の経験から獲得される自分自身と世界に対する1つの態度”であり, 他人に対しては一般に筋の通った信頼を, 自分自身に対しては信頼に値する

感覚を意味する。他者に対する安定した信頼感の形成が自己に対する信頼につながるとされる。

- 24) 田中尚彦 (2015) 「子ども・若者の居場所」, 「特集子どもの居場所 part 2 貧困や格差に取り組む活動のいま」, 『子どもと読書 (414)』, 親子読書地域文庫全国連絡会, pp.4-5.
- 25) ギル・ヴァレンティン著, 久保健太訳, 汐見稔幸監修 (2009), 『子どもの遊び・自立と公共空間』, 明石書店, pp.197-198.
- 26) アマルティア・センは, 「自由を得る機会については, 一般に「潜在能力〈ケイパビリティ〉」という考え方が有意義なアプローチを示」すとしている。センは, 「潜在能力〈ケイパビリティ〉」について, 「人間の生命活動 (functioning)」を組み合わせる価値あるものにする機会であり, 人にできること, もしくは人がなれる状態を表」すとする。また, 「『潜在能力〈ケイパビリティ〉』という考え方によるアプローチは, 人が扱える手段ではなく, その人に現実に与えられている機会を重視してい」る。「人がこの機会を利用するか, しないかは自由」である。「潜在能力は, 既存のものに代わる, 生命活動の組み合わせを表しており, 人にはそれを選択する自由があ」る。アマルティア・セン (2006) 『人間の安全保障』, 集英社出版, pp.151-153.
- 27) 大宮勇雄, 安斎育郎著, さくら保育園編 (2014) 『それでもさくらは咲く—福島・渡利 あの日から保育をつくる』, かもがわ出版, pp.20-24, pp.165-167参照.
- 28) 『千葉市こどもプラン 平成27年度～平成31年度』 (2015), p.100参照. <http://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/kikaku/chibashikodomoplan.html> (2016.1.19参照)